

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第四部

第二十六章

paleontologist Paley

— 古生物学者 ペイリー —

峯村 明

目次

paleontologist Paley	
登場人物	2
paleontologist Paley	4
あとがき	12
奥付	13

paleontologist Paley

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
マックス・ペイリー	古生物学者 健の友人
ボディーガードX	サーディクのボディーガード
謎の女	
イリチャ	真の魂体

cast26.JPG

paleontologist Paley

262.

ペイリー？　今ごろ何の用だ？

健は真っ先にそう思った。彼はたしか、ゴビ砂漠にいるんじゃないかったか？　気楽に会える距離ではない。たがいにもったに電話などしない。だから、（何の用だろう——）

いっしゅん不思議に思いつつ、次に胸騒ぎを覚え、電話を受ける。「はい？」、と。

《——ヒヤマ？——》

「そうだよ。オレだ。ペイリー？　もしもし？」

《ヒヤマ——》

「ペイリー？　どうした、なにかあったのか？」

《ああ——ちょっと、さ、はねられちまって——》

「え——今どこにいるんだ！？」

《病院の救急。空港出たところで車に——通りすがりの人が病院へ連れてきてくれた——》

はねられたショックなのかペイリーのいうことはまるで要領を得なかった。空港というのはなんと目と鼻の先のブリュッセル空港、病院も市内だった。健は驚いてしまい、とるものもとあえず、の態で席を立ち、オフィスを飛び出した。

263.

「ヒヤマ～」

ペイリーは泣かんばかりで、健の顔を見るなり、子どものように情けない声をあげた。

「ほんとにヒヤマか？　ほんとに？　地獄に仏とはこのことだ～友よ～」

彼のケガは、車にはねられたといってもたいしたことはなく、擦り傷と打ち身を数カ所に作っていただけだった。のに、本気で涙ぐみ、友の手を両手で握ってきた。

なんなんだ、とやはり怪訝に思いつつ、健は「よかったじゃないか、軽傷で」と慰め、もしかしたらこいつ、治療費用が払えないんじゃないだろうかという考えが頭に浮かんだ。

ところが、「治療費用？　それは心配ない。俺をここへ連れてきてくれた人が払ってくれた」という。

「ふうん？」（ケガ人を助けて病院まで運び、費用も払ってくれた？　ありがたい人だ）
「通りすがりの人だといったな」

「ああ、今ちょっとはずしてるけど、すぐに戻ってくるはずだ、戻るまでここを動かないように言われてる」

「そうか……」ケガの具合が心配でずっとなにも考えられなかったが、軽傷だったことでほっとした。とはいえ、訊きたいことがいくつもある。頭の中で整理しながら「ペイリー……」と口にしたときだった。

「俺、えらいことに関わっちまったらしい」、とペイリーは呟いた。健は黙って耳を傾けることにする。

「仲間は散り散りになっちまって、いつの間にか誰とも連絡がとれない。とにかく——逃げなきゃ——でも、どこへ？　考えに考えて——ブリュッセルにあんたがいることを思い出した。それでなければのカネはたいて——」

「オレのところへ？　逃げてきたっていうのか？」思わず強い口調で返してしまった。

健の強い視線を避けるように、ペイリーは目線を落とし、こっくりとうなずいた。そういえば伸び放題の髪とひげ、額には絆創膏、シャツもパンツもかなりくたびれている。健が知っている豪快で開けっぴろげでこぎれいなマックス・ペイリーとはかなり違っていた。

「迷惑だということはわかってる。あんたここで仕事してて、奥さんも子どももいっしょなんだろう？　わかってるって。でもな、ほかに考えつかなかったんだ。すまない。ヒヤマ」

「うん……なあ、ペイリー、話してくれ、なにがあったんだ？」

「それなんだが——俺たち——友だち、だよな？」

健はまじまじと相手のひげ面を見た。
(なにを言ってるんだこいつは。オレたちは何年つきあってるんだ)

ペイリーの実家はけっこうな資産家らしいが、実業家である父親は常々言っていたという。

「カネにならん商売は商売ではない」。

息子の古生物学者としての活動には冷淡だったのだ。母親の方はまだ理解があって、学生時代はさまざまに援助してくれていたそうだが、あるとき母親の援助が父親にバレて、彼女はこっぴどく叱られたらしい。母親は泣く泣く援助を打ち切り、それ以来、実家とは疎遠になってしまった。

学生時代の健が奨学金について熱心に調べていたのは自分のためではなく、友人のためだったのだ。

ペイリーはフリンダース大の古生物学研究ラボに籍があり、研究費用などはそこから出ているはずだが、好奇心旺盛な彼のこと、研究ラボに関係ないことであちこち移動する癖があった。そんなことが数回あって、そのたびペイリーは健に泣きついてきた。そしてそのたびペイリーは興味深い発見をしてきている。その古生物学者としての嗅覚は健にとっても興味深いもので、金銭の援助も苦にはならなかったのだ。

(まあ……金銭で繋がっているような関係だけど)、と健は思う。しかし、こいつは今にとんでもないモノを掘り当ててるのではなかろうかという匂いがあったのだ。

ペイリーは呟くように言った。「俺——とんでもないモノ、掘り当てちまった——」

264.

彼らは救急外来の廊下の端っこのベンチで話し込んでいた。待合室はひっきりなしに人が出入りしていてざわついている。深刻な話であっても人の耳に届く心配はなさそうだった。

健は思わずオウム返しに訊いた。「——とんでもないモノ、って？」

ペイリーは目を上げ、友を見、口を開きかけた。「あのな——」

その時、誰かが足早に近づいてきた。そしてふたりの傍らで立ち止まった。病院の人間だろうと思った健は不用意に顔を上げて相手を見た。

それは女で——健と目が合うなり、すばやくサングラスをかけた。いっしゅんだったが、真っ青な目だった。青い目にもいろいろあるが、おそろしく——知的な青だった。髪は白金色のショートヘア。薄手のトレンチコートを腕まくりし、コートの下は黒いシャツと黒いパンツで、足元は黒いローヒール。なぜか、ふつうの人間じゃない、というのが健の第一印象だった。

「お待たせしました」、と女は言った。ペイリーに。この女がペイリーの話に出てきた“通りすがりの人”らしい。

女はペイリーだけ見て、「この方は？」、と尋ねた。硬い響きの声で、若干、苛立たし気な口調で。

「友人だよ。つい電話しちまった。そしたら、あっという間に飛んできてくれた」

「——そうですか。お友だち——」

女は少し逡巡し、「仕方ありません」と言った。「ではお友だちも、ごいっしょに」そう言った時にはもう踵を返していた。

「いっしょに？ オレも？ ちょっと待って！ なんのことだ！」健は思わず立ち上がって声をあげた。ペイリーもそろそろと立ちあがっている。

「お静かに。目立ちたくありません。なにげなく私の後についてきて」

彼女は立ち止まらず、体を半分返してそう言った。「さ、急いで」

目立ちたくないって？ 救急外来なんて場所でサングラスかけてる、あんたが一番目立ってるじゃないか！ なにげなく急げって？ なんなんだ！！

265.

ペイリーはさすがのような目で健を促している。女に従うことに、まるで異論がないようなのだ。通りすがりだって？ 何者なのかわからん女じゃないか。助けてもらって治療費まで払ってもらったとはいえ、おまえそういうやつだったのか？

と、言ってみようが如何せん、女はずんずんと先を歩いて行く。ペイリーもまた遅れまいと歩を早める。まるで催眠術にでもかかっているかのように。なんの疑問も抱いていない、ように健の目には見える。まだろくに話もしていないが、ペイリーの口ぶりでは何事かトラブルに巻き込まれた印象だった。

この女がそのトラブルの元凶なのか？　なのに、ついて行こうというのか？　それとも？

あれこれ考えているうちに。すぐに病院の外へ出た。病院は大通りに面していて大きな駐車場を備えている。健の目に真っ先に飛び込んできたのは駐車場の出入り口付近で回転灯をつけて停車しているパトカーだった。それを見るなり、女は、うっ、と息を詰めた。ほっそりした背から動揺が伝わってくる。

パトカーは一台の乗用車の進行方向を遮るようにして止まり、警官が車内のドライバーに話しかけていた。

そのドライバーがふっと視線を投げた。警官の体越しに、女を先頭にした健たち一行の方へ。

ほんの一瞬だったが、警官は見逃さなかった。素早く体を巡らすと、その手に、銃が握られていた。警官のサングラスが光を弾いた。信じられないことに、それは明白な殺意だった。警告なんかじゃない。彼の手がずっとあがり、銃口がまっすぐ女の頭部に向けられた。

頭の中が真っ白になるという感覚を健は味わった。女は健の真ん前にいる。彼女を突き飛ばすなり、伏せるなり、なにかアクションを起こさなければ——やられる。しかし——体が動かない——

次の瞬間、二つのことが同時に起こった。銃を構えていた警官が悲鳴をあげ、健たちは三人まとめて横からなぎ倒された。

「こっちへ！　早く！」男の低い声が三人を促した。有無を言わせない力強い声。従うほか選択肢はないという声だった。

「——X！？」

駐車場付近にいた人々は騒然となった。銃を持ったままの警官が、ネコに襲われているのだった。

266.

Xは駐車場のロータリーで客待ちしていたタクシーから運転手を引きずり出し、鳩尾に当て身を見舞った。

「車ならオレのがそこに」と健は言いかけたが、Xは「no」と鋭く言った。「自家用車は足がつきます。こういう時は借りるに限ります」

Xが運転席に、女が助手席に、申し合わせたように滑り込む。この近辺の地理に疎い健やペイリーでは道案内は務まらない。Xも詳しいわけではないが、女はほかの三人よりはるかに詳しかった。さっそく、右に左にとXに指図している。

後部座席の窓を開け、健は指笛を放った。ヒューダーがしていたように。ヒュッ、と鋭く短い音に、警官を引っかいていたネコはすぐに反応した。体をひるがえし、ボールのように跳ねてタクシーの窓に飛び込んだ。

パトカーに止められていた乗用車はとうに現場から逃げ出していた。女はそれを目で確かめてほっとした表情を浮かべた。

が、パトカーは黙ってはいない。運転手は引っかかれた同僚に「さっさと乗れ！」と怒鳴っている。同僚は「病院へ行く！」と叫び返している。「俺はネコアレルギーなんだ！！

死んじまう！！」

警官たちのすったもんだを横目に大通りへでたXはアクセルを踏み込んだ。ぐん！　と体がシートに押し付けられる。そしてあっという間に車の流れの中へ紛れてしまった。

「ほかのパトカーが追ってくるかもしれませんが、しばらくは大丈夫でしょう。さ、どこへ向かいますか？」Xはタクシー運転手のようなセリフを言った。

「あなたは誰なの？」

女以外の三人はなんとなく顔を見合わせた。

「えーと、俺はあんたに助けられた者だ」

「オレは彼の友人。ブリュッセル市内の病院にいるっていうんで、駆けつけた。今ハンドル握ってるのはオレのボディーガード」Xはうなずいた。

それから、「ニャア」とネコの鳴き声。ネコは運転手以外の三人の膝をさ迷ったあげく、女の膝を選んでいた。

「おまえ……ひょっとして、バランケか？」とペイリー。ネコの耳がぴくりと動き、女の膝からペイリーの膝に乗り換えた。

「やっぱり！　そーかー！　あの子ネコちゃんかー、すごい戦いっぷりだったぞー」

「そりゃそうだろ、なんたって前世はジャガーだから」

女ははっとして後部座席を振り返った。「ジャガーの、バランケ？ 総督家の？」

267.

この女はいったい何者か。総督家のジャガーという、ペイリーにはわからない言葉を巡って、女と健との間に火花が散る気配があった。

車はずっと一般道を走っている。地元の者でなければ知らないような道を使って郊外へ向かっているようだ。すでに夜半を回り、灯火も少なく、周囲の景色もよくわからない地帯にいる。

と、Xが口を開いた。淡々という。

「背後にパトカーがいる。回転灯はついてないがパトカーだ」

X以外の三人はぎょっとした。

「そもそも——なんでパトカーなんだ！ 貴女は警官に撃たれそうになった。なぜだ。それに——ペイリーを、オレまで、どうするつもりだ」

しばらく間を置いてから女は言った。「教えてください。総督家のジャガーを知っている貴方はだれ？」

会話がまるでかみ合わない。双方わからないことが多すぎる。互いにどこから手をつけていいやらさっぱりわからない。その時、Xが妙な声をあげて、またまた三人をぎょっとさせた。

「どうしたんだX」健はおそるおそる訊いた。Xがそろそろと手をあげて後方を指さすので、健はつられて後方をみた。

道路をふさぐように、なにか——いる。あるいは、ある。白くて、大きなものだ。それはXが通過した時にはなかった。上から降りてきて彼我の車の間に割り込んだのだ。

後方の車、パトカーは急ブレーキ。つんのめるように止まった。ドライバーらは呆然としている。自分の視ているモノがなんなのか、理解できないでいる。

けれども、ここにいる理由はない、ということは理解できた。上から見下ろしている紅い目がそう言ったのだ。標的は暗闇に紛れて行方をくらました。彼らは標的を見失うというミスを犯した。もう追いつけない。

ついては、ここにいる理由はない。戻ろう。来た道を。彼らはその場で肅々とUターンし、戻って行った。

パトカーのずっと背後を、こっそりつけている車がいた。パトカーが急停止した時にあわててヘッドライトを消し、道路を外れて隠れ、様子を伺っていた。パトカーが戻ってきて、遥か彼方へ去り、姿が見えなくなるまで待つてようやくライトをつけ、先行していたタクシーと合流した。

その時にはあの“白くて大きな何か”はもういなかった。

268.

パトカーがいなくなると、タクシーからつぎつぎと人が降りてきた。そこにはあの白くて大きなモノではなく、少年がひとり、立って、ばんばんと手をはたいていた。

「おまえか」健は安どの息をついた。何がどうなっているのやら、目が回りそうな展開だが、イリチャのおかげでとりあえず危険は去ったらしい。

女がゆっくりと健の隣に並んだ。サングラスはとうに頭の上にはねあげ、ロボットを思わせる硬質な目は少年に釘付けになっている。「彼は貴方の知り合いですか？ まさか——イリチャ——？」

いきなり知らない女性から名を呼ばれてイリチャはびっくりした。「——ア——アルチニアさん？」

「イリチャなのね！！」

「アルチニアさん！ アルチニアさんだ！！」

あとがき

健がよく知っている人物で、意外な人、誰かいない？ その人にどうしても会いに行かなきゃならない。その上、一晩帰宅できない...

そうだ、ペイリーさん！

ゴビ砂漠にいる人にはもう会う機会はないと思い込んでたけど、だったら会いに来てもらえばいいじゃない。それもトラブルつきで！

ペイリーさんという名は、paleontologist（古生物学者）から取ったものです。

2026 年 7 月 26 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十六章 paleontologist Paley

2026 年 7 月 27 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「イラスト A C」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

I Akira Minemura 2025-2026

リ・コンストラクション-26

著 者 峯村 明
イラスト イラストA C

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
